



AlpackaRaft メンテナンス・修理ガイド

完全版(オフライン保存用)

Packraft Hokkaido

packrafthokkaido.net

このドキュメントは、保証書のQRコードからダウンロードされたオフライン用フルコンテンツ版です。フィールドで電波が届かない場所でもご活用いただけるよう、オンライン版の各記事の内容も含めて一冊にまとめています。

最新版・更新情報はオンライン版でも公開しています: packrafthokkaido.net/alpacka-maintenance-guide

Packraft Hokkaidoでアルパカラフト製品をお買い上げいただき、誠にありがとうございます。

このガイドでは、パックラフトを長く良い状態で保つためのメンテナンス方法と、トラブル時の修理方法をまとめています。

目次

1. フィールドでのケア
2. 自宅での清掃・保管方法
3. カーゴフライ(TIZIP)のメンテナンス
4. テンパーアシストバルブの仕組みとトラブルシューティング
5. リーク(エア漏れ)診断
6. チューブ・フロアの修理
7. バルブ修理(メインバルブ・エルポバルブ)
8. 推奨リペアキット
9. まとめ・保証請求について

1. フィールドでのケア

パックラフトは「酷使に耐えるギア」として作られているため、フィールドで特別な手入れを意識する必要はほとんどありません。

ただし、唯一気をつけたいのがカーゴフライジッパー(TIZIP)です。砂やチリ、ゴミが噛み込むと開閉が重くなったり、シール部分が傷んだりする原因になります。トリップ中はジッパー周りに異物が付かないよう、軽く気を配っておくと安心です。(詳しいメンテナンス手順は「3. カーゴフライ(TIZIP)のメンテナンス」を参照してください。)

また、パックラフトを背中や自転車に固定して運ぶスタイルもよく見られますが、長時間の摩擦は生地への摩擦につながります。固定方法やパッキングの仕方によって、艇体の同じ箇所が擦れ続けることがないように注意しましょう。

2. 自宅での清掃・保管方法

トリップから帰ったら、ちょっとしたケアでパックラフトの寿命が大きく変わります。

清潔に保つ

中性洗剤で洗うことで、艇を清潔に保つだけでなく、川の水を介した外来種の拡散防止にもつながります。

しっかり乾燥させる

濡れたまま保管すると、カーゴフライのジッパーが傷んだり、独特の強い臭いが発生したりすることがあります。一度ついてしまった臭いは取り除くのが大変です。トリップごとに、艇を吊るすなどしてしっかり自然乾燥させてから保管することをお勧めします。

保管場所

風通しの良い、涼しく乾燥した場所での保管が基本です。吊るす・ゆるく巻く・折りたたむといった方法が適しています。きつく巻いてスタッフサックに収納したまま保管すると、変色やシミの原因になることがあるため、長期保管時のスタッフサック収納はおすすめしません。また、紫外線による劣化を防ぐため、直射日光の当たる場所への保管も避けてください。

使用前の耐航性チェック

長期保管後や、防水シート・ソリ代わりなど設計外の用途で使用した後は、見えないダメージが残っている可能性があります。次回使用前には、必ず艇全体に損傷がないか確認しましょう。

UV保護スプレーは使用しない

艇に「UV保護剤」やそれに類するスプレーを使うと、修理材料や接着剤が定着しにくい硬いコーティングが形成されてしまいます。誤って使用してしまった場合、効果が薄れるまでは現場での補修や付属パーツの接着が難しくなる点にご注意ください。

3. カーゴフライ(TIZIP)のメンテナンス

カーゴフライジッパー(TIZIP)は非常に高性能な防水ジッパーですが、一度破損すると交換にはそれなりのコストがかかります。日常的な洗浄と潤滑によって、スライダーやシール部の負担を大きく減らすことができます。

メンテナンス手順(6ステップ)

- ① ジッパーを閉じた状態で、布に専用潤滑剤を少量含ませ、ウレタンラミネートされた外側表面に染み込ませます。ジッパーの歯に直接潤滑剤を塗らないことが重要です。
- ② 閉じた状態の外側表面全体が薄く覆われるまで、布でなじませます。
- ③ 余分な潤滑剤を布で拭き取ります。潤滑剤が残りすぎると、砂や埃を吸着して逆効果になります。
- ④ ジッパーを開き、チェーン部とシーリングエッジに布でごく薄く潤滑剤を塗布します。
- ⑤ ドッキングする端部(差し込み口)に少量の潤滑剤を塗ります。
- ⑥ 数回ゆっくり開閉して、動きが滑らかになるのを確認します。

TIZIPは「防水」と「気密」を同時に担う精密パーツです。開閉が重くなった、砂が噛んだ、という状態で無理に操作すると、シール面の摩擦やスライダー破損につながります。

- 使用前後の洗浄
- 定期的な潤滑
- 完全に閉めてから運搬すること

この3点を習慣化するだけで、カーゴフライジッパーの寿命は大きく延びます。

4. テンパーアシストバルブの仕組みとトラブルシューティング

AlpackaRaft社のテンパーアシストバルブは、パックラフトを膨張させる際の空気の抜けを最小限に抑え、空気圧を楽に上げられるシステムです。他のインフレーターポートにあるような完全な一方バルブではなく、スプリングと連動して空気が通過するたびに開閉し、内圧が高まると自動的に閉じる構造になっています。少ない労力で高い空気圧まで持っていける、優秀なバルブシステムです。

膨張させる時(バルブを閉じる)

青いダイヤルを反時計回りに回して閉じた位置にし、インフレーションバッグをバルブに通します。インフレーションバッグの使用時、容量が近づくと内部のフラップが閉じて空気の損失を防ぎますが、フラップを押すのに十分な内圧がかかるまでは完全には閉じません。できるだけ多くの空気を入れた後、インフレーションバッグを取り外します。この時点ではまだ「シュー」と空気が漏れる場合がありますが、これは正常です。

口からバルブに直接息を吹き込み、チューブがしっかり膨らむのに十分な圧力をかけます(Pack-A-Pumpを使うと効率よくポンプアップできます)。バルブキャップをねじ込んで初めて気密状態になります。出発前に、水中でパックラフトを冷やし、圧力が安定するまで空気を追加してください(「テンパリング」と呼ばれる作業です。詳しくは「5. リーク(エア漏れ)診断」も参照)。

収縮させる時(バルブを開く)

青いダイヤルを時計回りに開いた位置まで回すと、空気が抜けます。保管時はバルブを閉じた状態にしておくことで、フラップへの圧力が解放され、負担を軽減できます。

見落としがちな盲点:ガスケットの欠落

「なんだかパックラフトの空気が少しずつ抜ける気がする…」そんな経験はありませんか?

原因の一つとして意外と見落としがちなのが、バルブキャップ内部の「ガスケット(パッキン)」の欠落です。通常はしっかりとハマっているため簡単に外れることはありませんが、バルブキャップを閉めずにパッキングした状態で持ち運んだ場合など、気付かないうちに脱落してしまうケースがあります。

バルブキャップは「空気の完全な密閉」と「内部への湿気侵入防止」という重要な役割を担っており、キャップを開けて初めて密閉される構造です。バルブだけでは密閉の状態にはなりません。

フィールドでガasketを紛失してしまった場合の応急処置として、ビニール袋をガasket代わりにキャップごと締め込んで密閉する、という方法もあります。完全ではありませんが、下山・下河までの応急対応としては十分役立ちます。

修理キットの中に予備ガasketを一つ忍ばせておくこと、そしてパッキング時は必ずバルブキャップを閉めること。この2点だけでも、トラブルの多くは防ぐことができます。

バルブのメンテナンス・ヒント

- バルブを清潔に保ち、砂やその他のゴミやチリが付かないようにしてください。(歯ブラシを持ち運ぶと良いでしょう。)
- ガasketがバルブキャップに装着されていることを確認してください。追加のガasketは付属のベーシックリペアキットに含まれています。
- 気温が低い状況では、プラスチック製のフラップのかみ合いに影響が出る可能性があります。
- ボートが古くなると、砂の蓄積や不適切な保管が原因でバルブの性能が低下する場合があります。

5. リーク(エア漏れ)診断

「なんとなく空気が抜けている気がする」というとき、まず思い出していただきたいのが「テンパリング」という現象です。

バックラフトは非常に低圧のボートのため、気温の変化で圧力が簡単に変わります。冷たい水に浮かべると、口やPack-A-Pumpから入れた温かい空気が冷えて収縮し、艇が柔らかくなることがあります。これは故障ではなく自然な現象で、出発前に何度か空気を追加して圧力を安定させる「テンパリング」で対応できます。バルブがしっかり閉まっているか(締めすぎにも注意)も、まず確認しておきたいポイントです。

それでも空気が抜けているようであれば、以下の手順で漏れ箇所を探してみましょう。

1. 落ち着いて全体を観察する

ギアを全て外し、完全に膨らませた状態で、艇の周囲と底をゆっくり点検します。

2. 音で探す

川の流れる音から少し離れた場所で耳を澄ますと、速い漏れであれば音で気づきやすくなります。

3. フロアの継ぎ目をチェック

可能であればヘッドライトで照らしながら、床にコップ一杯程度の水を注ぎ、艇を横向きに持ってゆっくり回転させ、チューブとの接合部に気泡が出ないか確認します。

4. 圧力がかかる部分を重点的に

グラブループ、シートの取り付け部、足がチューブに触れる部分など、負荷がかかりやすい箇所は特に注意して見てみましょう。

5. 石鹼水でチェック

キャンプ用ソープをよく溶かした石鹼水を疑わしい箇所やバルブにかけると、漏れがあれば泡が膨らんで一目でわかります。

6. 水没チェック

それでも見つからない場合は、艇に少量の空気を入れてバルブを閉め、水中に沈めて気泡の流れがないか確認する方法もあります。

6. チューブ・フロアの修理

バックラフトに穴が空いたり、生地が裂けてしまったりした場合、慌てずに状況を見極めることが大切です。

どんな時に穴が空く？

- **ピンホール穴:** 穴あき箇所の特定は難しく、徐々に空気が抜けていく「スローパンク」が多いパターンです。次の上陸ポイントまで適宜空気を入れながら進み、上陸後に対処を考えれば十分なケースがほとんどです。
- **エア抜けがわかるくらいの穴:** そのままでは沈没してしまうため、すぐに上陸できる場所を見つけて補修します。
- **パネルの裂け:** すぐに沈没してしまうため、直ちに上陸箇所を探してください。現場修理が難しい場合は、エスケープルートの確認や、仲間のバックラフトでの移動も検討します。
- **フロアの裂け(アウトーチューブは無事):** コックピット内に水が入ってきます。上陸できる場所を探してフロアを修理しましょう。

修理キットに入れておきたいマテリアル

1. **アルコールワイプ** – パッチや接着剤を塗布する前の清掃・脱脂用
2. **Patch-N-Go®** – コーティングされた布地に貼ることで透明で長持ちするパッチになる(日本では入手しづらいため、Aquaseal®+UVとタイベック®テープで代用も可能)
3. **Tenacious Tape®** – コーティングされていない生地裏張りや、インフレーターシートのピンホールの短期修理に最適
4. **Aquaseal®+UV** – 太陽光で短時間硬化するシーラント。恒久修理にはやや耐久性不足
5. **タイベック®シーティングテープ** – コーティングされた生地に貼る、一時的だが高耐久な現場修理の定番テープ
6. **ゴリラテープ®** – アウターチューブやスプレーデッキの裏張り、フロアの破れ修理に最適
7. **ライター** – Patch-N-Go®は40度以上でないと貼れないため、シートを温めるのに使用
8. **はさみ** – テープのカット用

現場補修の定番:タイベック®シーティングテープ

タイベック®シーティングテープは、フィールド補修によく使われるダクトテープのパックラフト版と考えてください。伸縮性がない分、裏のアクリル接着剤がパックラフトに非常によく接着し、長く巻けば巻くほど強度が出ます。4.5mあれば、ピンホールから大きな裂け目まで補修して、再膨張させて帰宅することができます。

ただし、フロアとシート(表面に凹凸があるため)、パルプ(平らでないため)には不向きです。帰宅後、永久に残したくない一時的な補修は剥がして、Aquaseal®などで本修理を行いましょう。

ピンホール・小さな裂け目(7.5cm以下)の修理

1. 空気を抜いて、対象箇所を洗浄・乾燥させます。アルコールワイプがあれば使用してください。
2. パッチの角を丸く切ります。Patch'N'Go®またはタイベック®テープを約2.5cm幅に切り、端を丸めます。
3. **Aquaseal® UVの場合:** 穴の周りをきれいにし、日陰を作って、穴の周囲に約6mm~1.2mmの厚さで薄くシーラントを塗布します。日光やUVライトペンに当てると5~10秒で硬化します。
4. **通常のAquaseal®の場合:** 夜間修理やタイベックテープの交換など、より時間をかけられる現場修理に向いています。硬化には最低6~8時間(Cotol Acceleratorを使えば1~2時間)かかります。塗布方法はAquaseal® UVと同様で、平らで乾燥した場所に置いて硬化させてください。

大きな裂傷(7.5cm以上)の修理

1. 空気を抜いて、表面を可能な限り清潔・乾燥させます。
2. 裏打ちテープを使用します。-両面コーティングされた布地(両面がプラスチック)は、外側に使うのと同じタイベック®やPatch'N'Go®で裏打ちできます。-片面コーティングされた布地(片面がプラスチック)は、緊急の場合はTenacious Tape®、Gorilla Tape®、またはダクトテープで裏打ちしてください。コーティングされていない側は水を吸収するため、拭き取るか自然乾燥させます。
3. 裏打ちの粘着面にペンで印をつけ、慎重に内側に置いて平らに押さえます。
4. パックラフトに貼り付けます。端をきれいにし、接着剤の密着を高めるためによくこすってください。寒い時はパッチを体温で温めると接着力が高まります。

16cmを超える裂け目・L字型の裂け目・継ぎ目部分

- 16cmを超える長い裂け目には、パッチにストレスがかからないよう、パッチの上に垂直方向にもテープを貼って横方向に補強します。
- 「L」字型の裂け目は、繊維の目に沿って2方向に裂けることがよくありますが、修理方法は基本的に同じです。まず修理箇所を裏返してから、チューブをシールします。
- 裂け目が継ぎ目・デッキ・フロアまで達している場合、ブラックテープの端から空気が漏れることがあります。裂け目がブラックテープと交差する部分にAquaseal®またはAquaseal® UVを少量塗布すると、これらの小さな空気の通り道を塞ぐことができます。少量だけ使用し、乾燥を待たずにすぐお好みのパッチで覆ってください。
- 破れがスプレーデッキの下まで達している場合は、デッキを固定しているブラックテープを破れから剥がし、補修テープがデッキの下を通せるスペースを確保します。チューブの補修が完了したら、パッチの上にデッキをテープで固定し直してください。

フロアの修理

損傷した部分の周りを清掃し、乾燥させます。

フロアの補修には、タイベック®テープよりもPatch-N-Go®の方が適しています。裏側より表側に貼る方が良いでしょう(裏側は擦れて酷使されるため)。Tenacious Tape®、Gorilla Tape®、ダクトテープは一時的な補修に向いています。Patch-N-Go®パッチの縁にAquaseal®を薄く塗ると、より長持ちする補修になります。

Aquaseal®は、床の傷んだ部分の穴の修理に最適です。傷んだ部分をきれいに清掃してから、裏面に仮の補修テープを貼り、穴を約3mmの厚さで覆うように

塗り込みます。Aquaseal®が流れないように平らな場所に置いて乾燥させてください。乾燥後、裏面の仮の補修テープは剥がしても構いません。大きな穴の場合は、さらに薄く重ね塗りますが、厚塗りすると剥がれやすくなるので注意しましょう。

裏打ち材を貼り付けたら、外側をタイベック®テープまたはPatch'N'Go®で覆って密封します。適切に硬化し、裏打ち材が丈夫であればAquaseal®も併用できますが、これは最終手段として考えてください。

7. バルブ修理(メインバルブ・エルポバルブ)

バルブ周りのトラブルは、原因を特定できれば現場でも対応できるケースがほとんどです。

メインバルブからの「シュー」という音

キャップを外した状態でバルブから空気が漏れる音は、実は正常な現象です。テンパーアシストバルブのフラップは注気時の空気抜きを軽減する仕組みで、密閉されるのはキャップを閉めて初めてです。(バルブの仕組みやガスケットについては「4. テンパーアシストバルブの仕組みとトラブルシューティング」を参照してください。)

Oリングの劣化・破損

メインバルブの密閉は、バルブキャップに取り付けられたOリングが担っています。バルブ周りのエア漏れは、このOリングの欠落・劣化・破損が原因であることが多いため、修理キットに入っている予備のOリングへの交換を試してみてください。2017年以降のバルブはOリングが原因のケースが大半ですが、2016年以前のモデルではバルブキャップのネジ山自体が経年劣化して漏れることもあります。

バルブキャップを紛失してしまったら

インフレーションバッグの接続パーツを外し、ビニール袋をバルブに被せてネジ込むと、緊急用のキャップとして機能します。ネジ山にジッパー潤滑剤を塗っておくと、密封性をさらに高められます。

バルブの溶接部(ベース)からの漏れ

バルブが艇に接着されているベース部分から漏れている場合は、Aquaseal®での補修が必要です。周囲をしっかりと清掃してから、漏れ箇所とステムのベース部分まで接着剤を浸透させるように塗布してください。

エルポバルブ(エアシート・バックレスト用)の修理

バルブとその下のネジ山部分に汚れがないか点検し、先端に少量の水を垂らして泡が出ないか確認します。

予備のノズルがある場合は、古いノズルを切り取って内側をアルコールワイプで拭き、新しいノズルのキャップを外して白いカラー部分に接着剤を塗布してから挿入します。このとき、ネジ山部分に接着剤が付かないように注意し、白いカラーは少なくとも3mmほど露出させてください(奥まで入れすぎるとバルブが閉まらなくなります)。接着剤が固まるまで、ノズル上部からチューブに縦方向にテープを貼って固定しておくとう安心です。

緊急時は、バルブホースを折り曲げて紐で巻き、物理的に空気が漏れないようにする応急処置も有効です。ホースの溶接部(根元)から漏れている場合は、メインバルブと同様にAquaseal®で周囲をしっかりと清掃してから補修してください。

8. 推奨リペアキット

ベーシックリペアキット(購入時に付属)

AlpackaRaft純正のベーシックリペアキットは、以下の7点セットです。デイトリップから数日程度の短距離バックラフティングであれば、通常の使用中に発生する故障の修理はほぼこれでカバーできます。

内容物	用途
Aquaseal 1/4オンスチューブ ×1	メイン接着剤。確実な修理に
3インチ円形粘着テープ ×1	応急処置・仮止めに
Patch-N-Go修理テープ(3×4インチ) ×1	簡易パッチ。現場での即時修理に
アルコールパッチ ×2	修理前の脱脂・清掃に
840デニールフロアファブリック(4×6インチ) ×1	フロア部の本格修理用パッチ素材
防水aLOKSAK再封可能バッグ(4×6インチ) ×1	キット一式の防水収納
AlpackaRaftステッカー ×1	—

フィールド(応急処置): Patch-N-Go修理テープまたは粘着テープで仮止めます。完全硬化を待たずに使用できるため、トリップを続けながら対応できます。帰宅後に本修理を行ってください。

自宅(本修理): Aquasealを使った本格修理を行います。修理箇所をアルコールパッチで脱脂・清掃してから、Aquasealを塗布してパッチを貼り付けます。完全硬化には約12時間が必要です。フロアの穴には840デニールのフロアファブリックをパッチ素材として使用します。

紛失した場合や使い切ってしまった場合、複数人グループの共用キットとして追加したい場合などは、Packraft Hokkaidoウェブショップでも単品購入が可能です。

エクスペディションリペアキット(長期・複数人トリップ向け)

複数人のグループでの長いバックカントリートリップや、長時間のパドリングが必要な場合には、ベーシックリペアキットに加えて以下のアイテムを揃えておくとう安心です。

- アルコールワイブ
- ライター
- タイベック®テープ
- 粘着テープ
- ゴリラテープ®
- アクアシール®(大チューブ1本または小チューブ2本以上)
- スペアバルブキャップ
- スペアノズル
- 裁縫キット
- はさみ/ナイフ(小型のLeatherman®またはSwiss Army®ナイフが最適)
- バルブキャップOリング
- チューブとフロアのファブリックパッチ
- ペン/マーカー
- 硬い毛のブラシ(歯ブラシが最適。カーゴフライジッパーの清掃用)
- ジッパー潤滑剤(カーゴフライジッパーモデル)

9. まとめ・保証請求について

バックラフトは「とにかく丈夫」が持ち味ですが、ちょっとしたケアの積み重ねが、長く安心して使い続けるための一番のポイントです。

万が一、製造上または材料の欠陥による不具合が見つかった場合は、ご購入時の保証書をご確認のうえ、記載のメールアドレスまでご連絡ください。(製品の状態説明、破損箇所の画像、保証書を撮影した画像をご準備いただくとスムーズです。)